

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：44514

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02237

研究課題名(和文) 平安初期歌合の研究

研究課題名(英文) A Study on Uta-awase in Early Heian period

研究代表者

竹下 麻子(三木麻子)(TAKESHITA(MIKI), Asako)

神戸教育短期大学・こども学科・教授

研究者番号：60544947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：最終年度は、『宇多院の歌合新注』(青簡舎)を刊行した。そこに、和歌注釈と各歌合についての考察、さらに同時代における漢籍文献の和歌への影響を示した。また、歌合歌の他集への収載状況を挙げ、享受状況を明示した。ここに宇多歌壇の歌合歌の実態と時代の好尚が明らかになった。

また、所在不明であった資料を参観、二十巻本歌合資料を翻刻・掲載することもでき、後の書写資料の伝本状況も明らかにできた。今後は、さらに書写資料を重視しながら、小規模歌合を研究することが重要であることも明確になった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来着目されることが少なかった『古今和歌集』成立以前の平安初期歌合について焦点をあて、和歌を一首ずつ丹念に注解することによって、漢文学の素養を持つ人々が、和歌表現にそれを融合させる試みや、和歌表現特有の歌枕表現や音に着目した修辞(物名歌の、物の名をそのまま和歌に取り込んで詠んだり、句の頭や末に物名の音を組み込んだりする表現)に、和歌を創作する意欲を高めた実態を明らかにし、古今集的表現が成立する一端を示した。

研究成果の概要(英文)：In 2019 we published a book of "new annotations of five Uta-awase - or poetry games - held by Emperor Uda" which was our study on the characteristics of each games and our examinations of the influence of Chinese poems on Japanese 31-syllable poems. We have added a poetry material of 20kan-bon which we were looking for, hence we could show how these materials of Ominaeshi-awae were being handed down to us. We would like to continue studying small but important poetry groups.

研究分野：日本文学

キーワード：歌合 宇多院 物名歌 菊合 女郎花合

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、古代日本において勅撰和歌集と並んで大きな和歌の発現の場であった「歌合」を対象とした。『古今和歌集』成立以前に、和歌が公的な場の文芸としてその地位を再確立するまでに、「歌合」が果たした役割は大きく、それは中国文化摂取後の和歌表現の確立を具現するものである。しかし、勅撰集として整理される以前の表現の混沌とした様相を示しているために、和歌の解釈が困難であるものも多い。

歌合資料については、研究と整備が進められる一方で、丹念な注釈が出揃うまでには至っていなかった。

そこで、古今集的表現の基盤を確立した宇多上皇期の歌合活動に焦点をあてて、「物名」歌的発想や漢詩漢文の影響など表現面の特色を明確にする注釈を行い、個々の歌人の特色を踏まえた宇多歌壇の「歌合」の内実を明らかにしたいと考えていた。

2. 研究の目的

『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』は、日本の三大歌集とも呼ばれる、古典和歌の代表的な歌集である。そのうちの一つであり、新古今和歌集の表現の基盤となった古今和歌集の表現の成立について考察する。

いわゆる国風暗黒時代を経て、漢文表現を下敷きにした、万葉集時代とは異なった新しい和歌の表現が「古今集的表現」として確立するまでの過程や試みを明らかにし、いくつかの洗練された和歌表現が「古今集的表現」として残る理由を社会の風潮や時代の文化との関連のなかで探ることを目的とする。

3. 研究の方法

歌合の書写資料を可能な限り参観し、本文を策定する。その本文により、和歌を注解し、それが提出された歌合の場で、和歌が詠まれた目的や果たした役割を考察する。それは、歌合の開催目的とも関連して、その時代にその目的の会が催行された理由を考察することで、この時代の活動が、勅撰和歌集撰集へどのように繋がるかを研究する。

4. 研究成果

宇多院の関連した歌合において、「菊合」のように物合として和歌が添えられる形の催しでも、「名所と菊」のような趣向が見られ、歌枕表現への関心の萌芽が明らかになった。

また、「女郎花合」では、宮中に於いて女郎花の美を競う「物合」という、文芸的性格よりも行事的性格が強い催しでありつつも、女郎花の美をいかに詠歌するかという表現の多様を競う和歌を合わせる場となり、表現面では女郎花の「物名」歌とした作品も多く見られた。

物の名の音を和歌に取り込む難しさと楽しさを後宴においても享受し、この趣向が「物名歌合」の開催へと繋がっていったことが明らかになった。ここで、「宇多院物名歌合」の成立時期推定に強い根拠を得たのである。また、これに関連して同様にいくつかの「女郎花合」が催行され、素材としての「女郎花」が宇多院歌壇の人々の興味の対象として継続したことも立証された。

「物名歌合」で「物名」を和歌に詠むことにおいては、即興的な要素を重視するのではなく、まず、兼題の策定など形式面を整えて歌合が開催されたことが分かる。開催時期に沿った題を選んだ上で、長い題を選び、難易度をあげるなど、「物名歌」を極める試みもあり、それはそのまま作品の完成度とは重ならないものの、物名歌の趣向の興味と限界を確認できた試みとなったことも判明した。

以下、各歌合ごとに詳述する。

(1) 寛平御時菊合の成果

物合における「和歌合わせ」の様式と表現の創出を立証

「寛平御時菊合」において、供される菊に添えるものとしての和歌でありながら、和歌の変革期を強く示し、新たな和歌表現を創出していく様子が明らかになった。中国から渡来した菊は漢詩の素材でこそあったが、その菊を和歌に詠むということ自体が当時は新しい和歌の模索である。その趣向は、左方は「大沢の池の菊」など名所と菊を結び付けており、後の和歌においては表現技法の定番ともなる歌枕表現の萌芽がここに見られた。右方の和歌がテーマとして取り組んだ、漢籍に由来する表現も、古今和歌の特徴の一つとなっていく。チームの競技である歌合の左右の方に異なる趣向を課したことも和歌的試みとして興味深い。このように、古今集以降の和歌表現の発端として宇多天皇の「菊合」は大きく寄与しているということである。

物合の素材としての「菊」の必然性を立証

菊という一つの素材を皆で詠むことは表現の多様性も生み出し、新たな時代の和歌表現を切り拓く取り組みとして、「宇多院女郎花合」など一連の宇多天皇の和歌活動として認められるものでもある。また、菊は重要な宮廷行事である重陽宴の素材であり、それを御前の歌会として開催することから、当時の歌合の位置付けや和歌が公的な場面へと進出していく一端も確認

することができた。

表現面からは、出典とすべき漢籍が豊富にあり、「菊」「聞く」の掛詞も有効に用いられる素材であることが、この時代に必要とされた素材であったことも明らかになった。このように、歌合の場で繰り返し開陳される、「菊」の典拠や修辞が、「うた言葉」の確立を示す方法の開示ともなるのであろう。

(2) 亭子院女郎花合の成果

伝本研究

行方不明であった旧森川如春庵蔵二十巻本の、陽成院歌合とは切り離され、独立した現状を確認する機縁に恵まれ、翻刻して発表することができた。また、二十巻本諸本を、五番左歌の処理の仕方によって三群に分け、第一群から第三群へ本文が変貌していったさまを跡づけた。

作者、関連和歌

作者として明記される宇多院の身内や専門歌人以外の作者や、当歌合に記されていないが当歌合に関連する和歌について、他の資料の中にその存在の可能性を探った。不詳の作者について旧説を再検討し考察を加えた(人物考証)。

「をみなへし」歌合が催された必然性を考察

物合に付随する本歌合のテーマが、「をみなへし」であったことが、「宇多院物名歌合」のような純然たる歌合の催行に対して重要な意味をもち、古今集への階段を確実に進めていることを確認した。「女郎花歌合」の和歌の読解が、「をみなへし」は愛でられる実在の景物であると同時に、その「をみな(女)」を含む名前自体に擬人法を生み出すという、和歌の世界に参入する契機を持っていることを明確にしたからである。本歌合後宴で「をみなへし」をテーマに物名や折句、沓冠といった言語遊戯が楽しまれていることもそれと無関係ではない。虚構の言葉の世界を確立した古今集時代へと、宇多院が強く導いたことがここからもうかがわれる。

(3) 宇多院女郎花合・朱雀院女郎花合の成果

両歌合とも、断簡でしか伝わらず、全容が分からない歌合であり、かつ、先の「亭子院女郎花合」との重複や本文の混入があり、『古今和歌集』などでも「亭子院女郎花合」と混同されている。しかし、二十巻本「和歌合抄目録」での扱い、混入・重複本文の訂正の有り様から三者は別に開催されたものと結論づけた。

(4) 宇多院物名歌合の成果

成立時期

従来ある諸説の中で、延喜五年(九〇五)以前とされた説と重なるが、「亭子院女郎花合」の検証から、本歌合の成立が、昌泰二年(八九九)正月と判明した。

時代的意義

主催者宇多院とともに、歌人として参加した貫之・友則・忠岑たちが「物名歌」の表現の可能性や詠み込む題の表現効果をここで検証することができた結果として、『古今和歌集』の物名部という部立成立に繋がったことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 三木麻子	4. 巻 45
2. 論文標題 物名を詠むこと（二）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 夙川学院短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 140(1)135(6)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三木麻子	4. 巻 43
2. 論文標題 物名を詠むこと 宇多院物名歌合・亭子院女郎花合を中心として	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 夙川学院短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岸本理恵	4. 巻 12
2. 論文標題 「寛平御時菊合」の和歌 - 宇多歌壇の志向 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 恵阪友紀子・奥野陽子・岸本理恵・三木麻子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青簡舎	5. 総ページ数 278
3. 書名 新注和歌文学叢書27 宇多院の歌合新注	

〔産業財産権〕

〔その他〕

夙川学院短期大学紀要（オンライン版：ISSN 2186-9324）
http://www.shukugawa-c.ac.jp/college/research/bulletin/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	奥野 陽子 (OKUNO Youko) (10116288)	大阪工業大学・情報科学部・教授 (34406)	
研究分担者	岸本 理恵 (KISHIMOTO Rie) (10583221)	尾道市立大学・芸術文化学部・准教授 (25405)	
研究分担者	恵阪 友紀子 (ESAKA Yukiko) (90709099)	京都精華大学・人文学部・講師 (34317)	